

駒澤大学

青木ゼミ

西村チーム

「Center Of Community ～大学生を架け橋としたまちづくり～」

参加メンバー（敬称略）	
チームリーダー：西村 匠（4年）	
岩下 響（3年）	鳴海 永香（2年）
槌屋 成希（3年）	田中 幹久（2年）
名波友莉花（2年）	須合祐美子（2年）
下永田結季（2年）	
指導教員：青木 茂樹（経営学部市場戦略学科 教授）	

Center Of Community

～大学生を架け橋としたまちづくり～

世田谷区には、人、商店街、歴史、イベントなど街についての多くの資源があり、世田谷区内の個々の街を見てもそれぞれが色濃く魅力的で独自の発展をしている。また、区内の大学の数も 12 校と多く存在しており、人数にしておよそ 89,000 人と世田谷区の人口の約 1 割もの大学生が通学している。これらは国内でも他に類を見ない恵まれた地域である。しかし現状は両者とも活かしきれていないことが問題である。そこで今回私たちは大学生にターゲットを絞った世田谷のファンづくりを行っていく。調査の中で大学生の多くは世田谷区が単なる通学地(点)になっており、自身の通う大学周辺の地域の情報さえ知ろうとせず、足を運ぼうともしない。

一つの要因として本来の街の姿を大学生が知らないという問題がある。世田谷区と地域に住む人々の抱く『街の顔（イメージ）』と大学生の抱く『街の顔』の認識に大きなギャップが存在し、興味や関心を持つきっかけがない。例えば、三軒茶屋は新宿渋谷のような大都会というイメージを持っており、わざわざ訪れようとしなない。しかし実際は昔ながらの街並みや横丁、おしゃれなカフェなど、大学生にとって魅力を感じる個性的な資源が豊富にある。

もう一つの要因として、世田谷区を周るにあたり適した移動手段がないことである。学生は移動手段として主に電車を利用するため、横（東西）の動きには強い。しかし、アクセスが良すぎるがため、区外の街へ出ていってしまう。

そこで私たちは大学生視点での街の魅力を大学生に PR し、気付かせ、訪れさせ、交流させる流れをつくる提案をする。具体的な内容として、地域が大学をツアーという形で周る企画がある。大学内でまちの一部を切り取ったようなイベントを展開する。更に大学生向けの冊子の用意と地域の人による PR を実施し、大学生の興味を引くような宣伝を行う。大学生に街の本来の魅力を「気付かせる」ことに重きを置いた活動である。

また区内に点在する 12 大学内にポートを設けたレンタサイクル企画では学生を実際に地域へ「訪れさせる」ことを目的とした活動だ。現在、鉄道をはじめとした横の動きには強い世田谷区だが、縦（南北）の動きのきっかけがないことが弱みである。自転車という移動手段を大学生に与えることによって、電車では築けなかった広がりを持った動きを提供する。また、大学がレンタサイクルポートという場の提供を地域にすることで文部科学省が推奨する「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」への積極的な取り組みに繋がり、地域貢献へ結び付けることもできる。

「交流させる」手段として、区が管理する学生のボランティア団体を立ち上げる。大学ツアーの運営並びに各地域イベントの運営を主体的に請け負う。そこには地域と学生と区役所の三者が相互にプラスに作用する仕組みがある。

様々な無限の可能性を踏まえ、世田谷区や地域は大学生のターゲットに特化した街に関する広告の出し方を考え直すべきであると私たちはもう一度主張したい。交流が活発かつ深みのあるものとなれば、学生と地域住民とのセーフティ・ネットワークの形成に繋がり、「災害に強く、復元力を持つ街をつくる」ことへ結び付く。私たちは在住者だけでなく通学者も含めた世田谷に関連するすべての人々を『区民』と定義し、「ひとりでも多くの区民が区政や公の活動に参加できるようにする。」

今回の提案で大学生に世田谷区の本来の魅力に気付かせ、地域やイベントに訪れさせ、人と交流させる。そして大学生が人やまちをつなぐ架け橋となることで、より豊かでより安心なまちになることこそ私たちが目指す世田谷区である。

Center Of Community

～大学生を架け橋としたまちづくり～



駒澤大学 青木ゼミナール

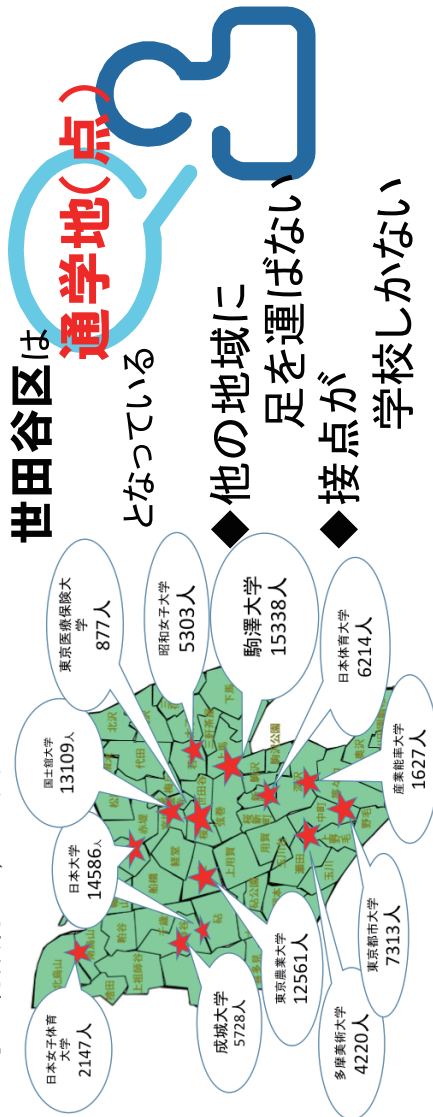
西村・岩下・槌屋・下永田・
鳴海・名波・須合・田中

ターゲット選定

ターゲット大学生

世田谷区内の大学数 12 校

学生総数約 89,000 人



しかし多くの大学生にとって

世田谷区は

通学地(点)

となっている

◆他の地域に

足を運ばない

◆接点がない

学校しかない

要因①

学生の世田谷区についての認知度が低い

- ・下北沢が世田谷区だと知らない。
- ・桜新町がサザエさんの町だと知らない (駒澤大学生対象アンケート回答の一例)



学生が知らない世田谷の魅力的な場所・歴史・お店は数えきれないほどある

要因②

世田谷区を周るにあたり適した移動手段がない

学生は主に移動手段として電車を使う。電車は世田谷区を横断するアクセスには強いが縦断するにはアクセスが弱い。



また、何でもそうろう渋谷・新宿で用事を済ませてしまう。

今の現状



世田谷区

非常に

もっていない

イベントなどで地域住民と交流することで世田谷区を第2の故郷と感じさせる

その力がこのまちにはある



またこのまちに遊びにおいて。

そこで、大学生の世田谷区ファンをつくる

3ステップ



気づいてもらう!

訪れてもらう!

交流してもらう!



大学生が地域に根付いていき若い力が地域を強くしていく



あのおばあちゃんがいる町だ!助けに行こう!!

事業案概要

現状からの問題提起

世田谷区内人口 約89万8000人
世田谷区内大学生人口 約8万9000人
世田谷人口の10分の1の数



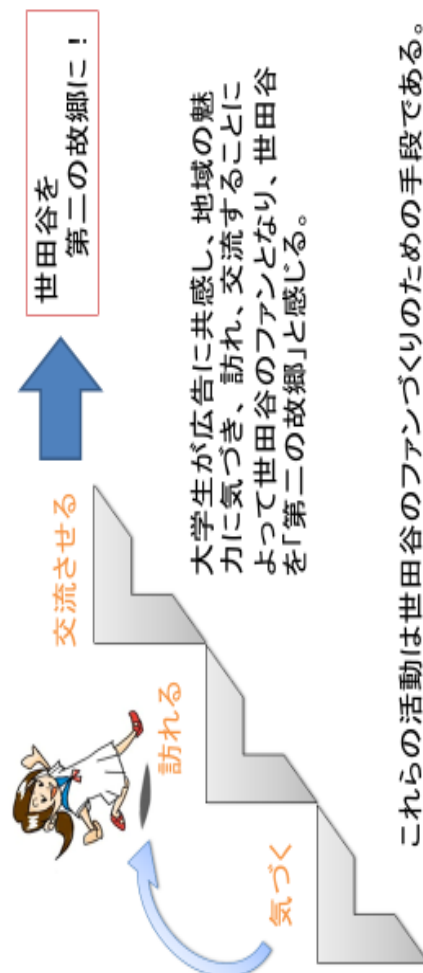
※ ● = 大学
そして世田谷区には大学が密集している

そこで、これを世田谷の強みと見なす。

※事業案のモデルとしては世田谷区内で最も生徒数の多い駒澤大学を想定。このモデルは他の大学でも利用できると仮定。

アイデアプラン

既存媒体のPRでは効果が見込めないため、大学生にターゲットを絞ったPRを打ち出すべきである。



企画① 地域の大学巡回 ツアー

世田谷という地域自体が大学を訪れて大学生に街を知ってもらうような活動をする。地域の情報に興味をもってもらい「訪れる」に繋げる。

企画② 大学から世田谷へ レンタサイクル

大学生に世田谷を知ってもらうことで、次は学生に自転車街を訪れてもらう。そして自転車での移動を充実させ、世田谷内の縦の動きと大学間の交流を強化する。

企画③ ボランティア団体イベント事務局の開設

現在イベント単体でボランティアを募集している現状から、大学生を中心としたボランティアをイベント事務局が募集し、管理してイベントの運営に関与させる。そこで主に学生が地域の人と交流することによって、世田谷への愛を深めてもらう。

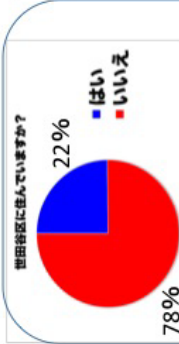
アンケートによる現状把握

対象:駒澤大学生 387 名

大学生アンケート調査

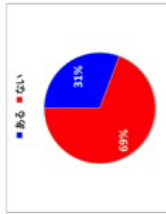
計3回実施。主な調査方法はGoogleアンケートフォームと聞き込み調査

世田谷区の地域に興味がありますか？世田谷区の地域に訪れたいですか？

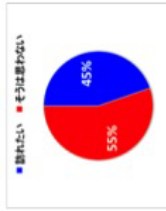


- ・世田谷に在住している学生数は22%
- ・その中で1人暮らしは17%
- ・在住者で世田谷に愛着を持つ人は9%

学生はほとんど世田谷に愛着を持っていない。



興味がある人が7割いるのに、訪れたいと思う人は半分に減っている
学生の半分が世田谷の地域を訪れたいと思っていない。
また、興味程度でしか思っていない学生もいる。



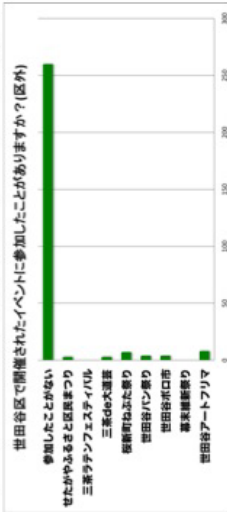
◆イベントについて

- ・世田谷区在住の学生
- イベント当日に直接その現場を見て知ることが多い
- ・区外の学生
- 電車の中の吊り、インターネット、学校や知人を通じて知る
- しかし実際には足を運ばない、学生の参加者は少ない

課題

学生がイベントに対して関心を抱いていない
告知が十分に行き届いていない、垂れ流しになっている

◆学生の地域イベント参加率について



区内外の学生ともに、ほとんどの学生が
イベントに参加したことがない

理由

- ・イベントについて知らない
- ・バイトなど用事が入ってしまっている
- ・電車が通っていない場所は行きづらい

◆課題まとめ

- ・縦の交通が不便
- ・学生が遊びに行くような場所が少ないと学生が感じている
- ・学生がイベントをはじめ、世田谷区に関心がない

そこで

- ★世田谷区の魅力に気づかせ、地域やイベントを訪れさせ人と交流させるよう、地域が大学を巡回するツアー企画
- ★電車を使った横の移動だけでなく、縦の移動も行いやすいような新しい学生のための交通手段の提供

あなたの大学にまちが会ってくる

せたがや

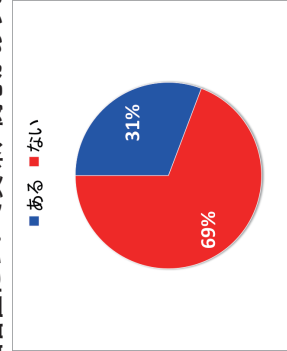
University of Tokyo



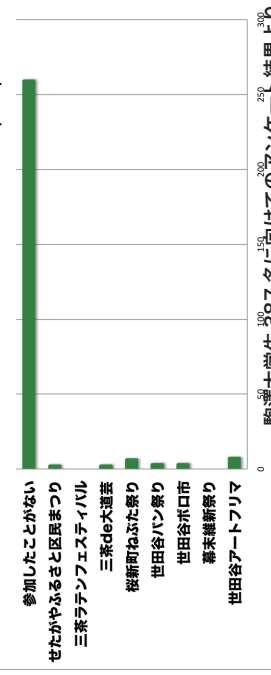
現状

アンケート結果

世田谷区について興味、関心がありますか？



世田谷区で開催されたイベントに参加したことがありますか？(区外)



三軒茶屋に行ったことがない

下北沢が世田谷区だと知らない

桜新町 = サザエさんという認識がない

世田谷区内の知り合いは学校の友人のみ

世田谷区との接点は大学最寄り駅と学校だけ

松陰神社が吉田松陰を祀っていることを知らない

馬事公苑、等々力溪谷、駒沢給水塔の存在を知らない

駒澤大学生向けインタビュー (268人) より

問題点

多くの学生が世田谷区に通学しているのにも関わらず、興味・関心が薄く魅力に気づけていない

一般的な街のイメージと大学生の持つ街のイメージにギャップがある

区や地域が情報を発信するとき、明確にターゲットに感じるまちの情報に特化した PR がない

知らないことから生じた

まちに対するイメージのギャップ

三軒茶屋

学生のイメージ
新宿渋谷のような
気づいていない魅力
昔ながらの町並みや横丁

二子玉川

学生のイメージ
高層マンション
気づいていない魅力
河原 花火 スポーツ 青春を感じる

あなたの大学にまちが会いにくる
せたがや
UNIVERSITY TOUR

モデル企画 桜新町 at 駒澤大学



大学内でまちの一部を切り取ったようなイベントを展開し、大学生向けの冊子の用意と地域の人によるPRを実施することで大学生の興味や関心をわかすPR活動である。

桜新町はサザエさんのまちとして知られ、閑静な住宅街や広い歩道、ソメイヨシノとはひと味違う八重桜の桜並木

そして住民がまるで磯野家の様にあたたかく親しみやすいことが魅力のまちである。

個性的な「桜新町サザエさんねぶた祭り」や「さくらまつり」は毎年地域住民をはじめとする人たちにぎわっている。

Point

学生の多くはまちを詳しく知らない

大学生の視点に合わせたまち魅力のPR

地域はPRの場や学生とのつながりを得る



Plan

地域住民によるPR

学食内にねぶた祭りで使用するねぶたをはじめ桜新町が味わえるような装飾を施し

大学生スタッフによるPR

大学生視点による大学生向けの情報発信

サザエさんカフェ サンク・イズマエル 雪うさぎ 砂の岬 駒沢給水塔 プラネタリウム

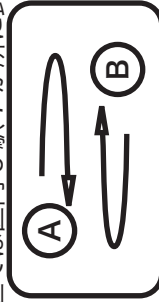
大学生にターゲットを定めたまちのPRにより

イメージのギャップを埋め桜新町に関心・興味をもたせまちへ呼ぶ

大学からせたがやへの レンタサイクル

現状

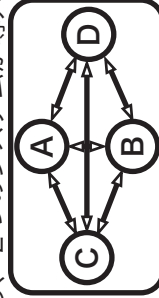
現在世田谷区では区内6駅7か所に民間のレンタサイクルポートがあり、2つのシステムが導入されている。



レンタサイクルシステム

自転車を借りた場所に返す単純なシステム

三軒茶屋、成城学園前のそれぞれ駅の駅前に設置されている



コミュニティサイクル

自転車を借りた場所とは別の場所に返却することが可能

利用のしやすさや他地域への広がりを多く見込めることが特徴

桜上水・経堂・桜新町・等々力の4ヶ所 通称「がやリン」

縦のアクセスが不便

世田谷区の魅力は大通りや駅前以外にも溢れていることから区内の移動に自転車は欠かせない

改善点：コミュニティサイクルシステムの増設、区外の利用者数、大学生の認知度

企画

大学にレンタサイクルを設置

大学生がせたがやを縦横無尽に移動する手段や

魅力発見のきっかけとして区と大学が連携して取り組む

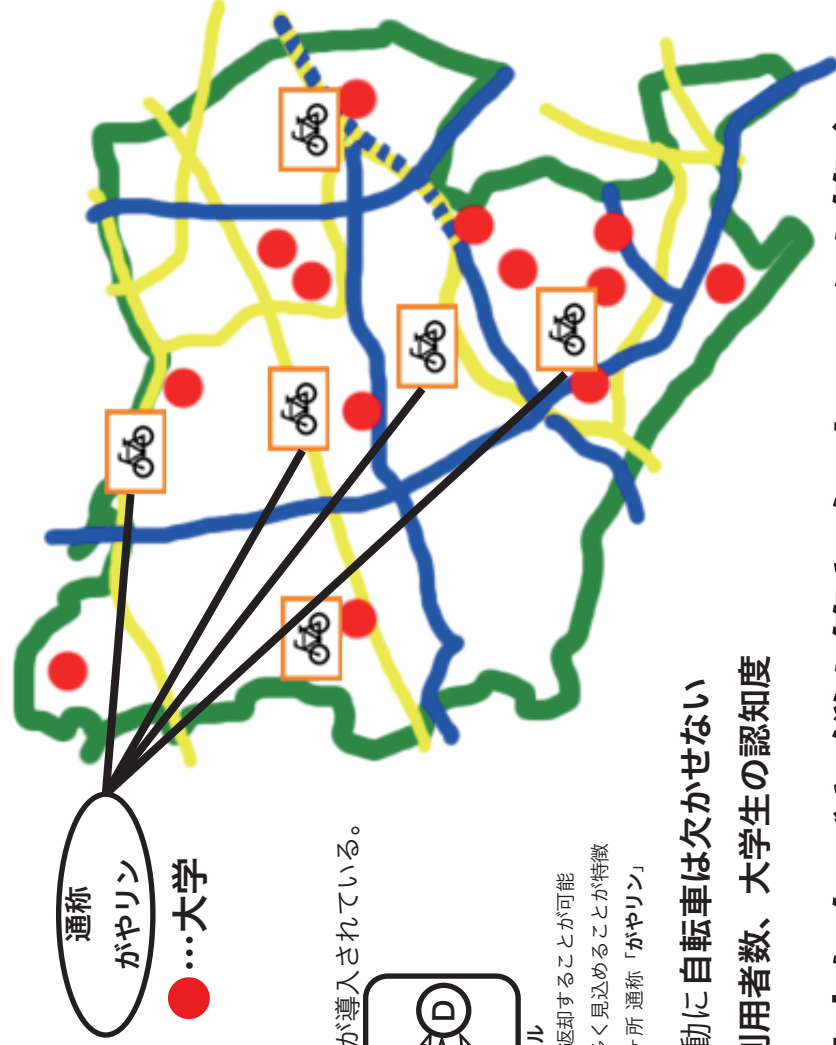
各大学のキャンパスにレンタサイクルのポートを設置し

コミュニティサイクルのシステムを導入し「がやリン」とも連携

通学のみを使用を避けるため日ぎめのみでの運営

学生や教員はもちろん地域住民も利用可能

人の動きがより広く より活発に



魅力に気づき 縦を築き ネットワークを築く

得られる効果

大学生がせたがやの魅力に気づける

大学近辺から行動範囲が広がり

せたがやを巡る喜びと知れる楽しみを感じることができる

縦のアクセスを築ける

世田谷区の弱みでもある縦のアクセスを容易にすることで今までとは異なる人が動く

ネットワークを築ける

コミュニティサイクルのシステムを導入することで広範囲での移動や

大学生という若者が地域に動くことで活性化し、人の地域とのネットワーク形成

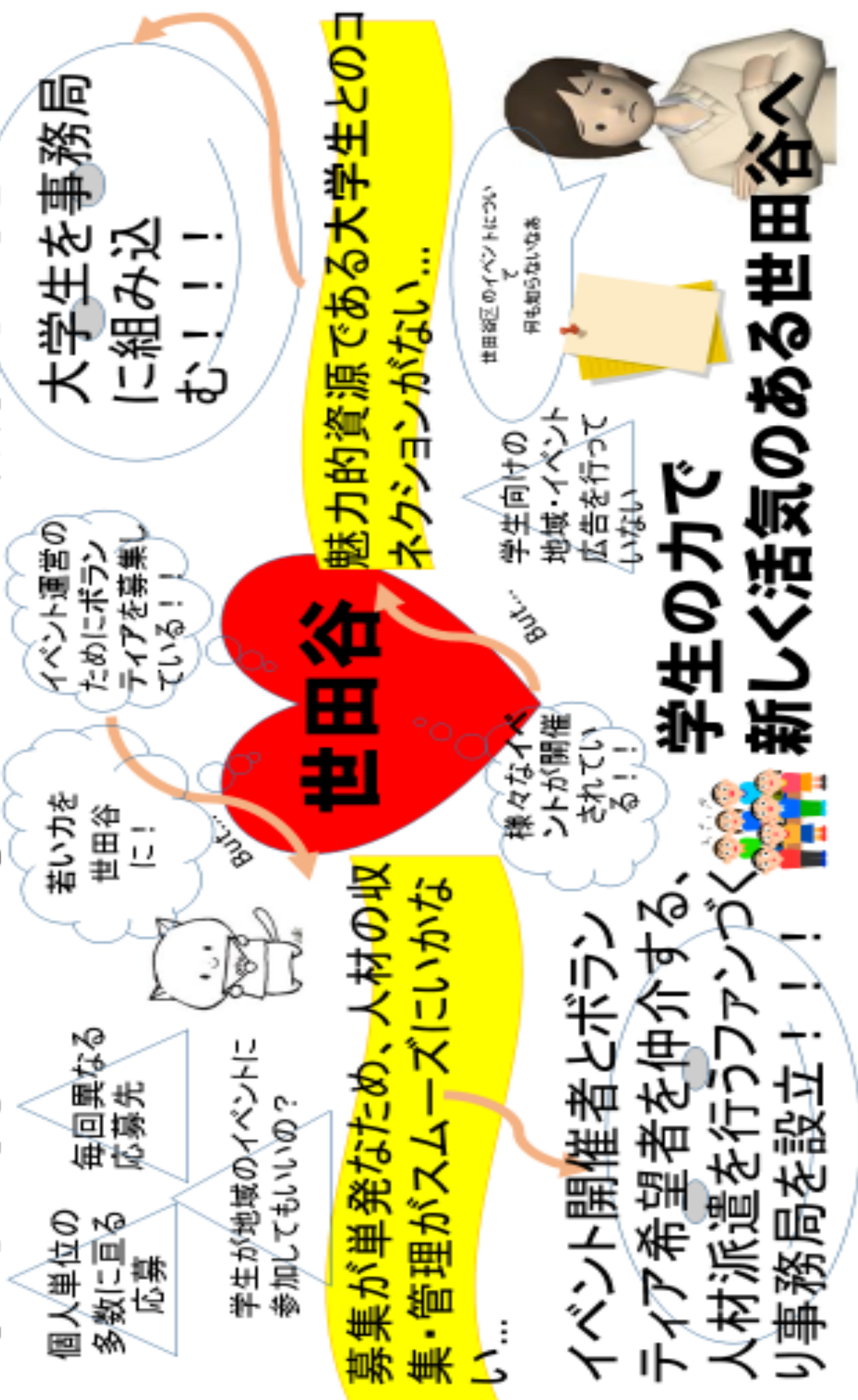
区内の個性豊かな大学間交流で知のネットワーク形成を見込む

大学がレンタサイクルに場所を提供することでCOCとしての大学の価値を高め

地域との交流や貢献を見込む

利用者が増えていくことで自転車のまちとして環境配慮や観光産業にもなり得る

世田谷×大学生＝地域活性化



ファンづくり事務局を創設して生まれるメリット

世田谷区



世田谷のファンを作ることができる

イベントによって区への関与を促すため。

セーフティネットを形成することができる

地域の方々と交流し親交が深まることにより形成。



イベント主催者
(地域)との強い
信頼が生まれる

事務局からの人材派遣となり連携を築くことができるため。

より多くの学生
が世田谷に関心
をもつようになる

関心をもつようになり、世田谷の地域のお店、施設に頻繁に訪れるようになる

※世田谷区役所職員は創設初期だけの参加とし、
ゆくゆくは学生のみで運営してゆく。

イベント主催者

求める人材をスムーズに収集することが可能となる

人材が事務局で管理されるようになるため。
若者の力でイベント参加者数

UP!! SNSなどの若者ならではの拡散能力、
友人に呼びこんだりと参加者数が増える。



学生

縦のつながりを築く
ことができる

卒業してからも事務局への参加が可能のため

大学を超えて世田谷間の
の学生交流が見込める

